

拡張現実感を用いたストリートミュージアムの研究

Study of StreetMuseum using the Augmented Reality

学籍番号：201421596

氏名：寺田 祥子

Shoko TERADA

拡張現実感を応用して、遺跡や歴史的建造物に過去の画像情報を重畳表示することで、当時の様子や雰囲気伝える鑑賞支援の取り組みが行われている。我々は、拡張現実感を応用して、遺跡や歴史的建造物といった現実の風景に歴史的絵画資料や記録写真・映像等を重ね合わせる屋外型文化情報提供技術をストリートミュージアムと定義している。その中でも、絵画資料の持つ資料性・芸術性とコンテンツ制作の容易さに着目し、絵画資料を用いた拡張現実感による鑑賞支援サービスについて研究を進めている。これまで、日本橋において「歴史的な建造物は消失してしまったが、歴史の記憶は残っている空間」における絵画資料を用いた拡張現実感の有効性を明らかにした。

本研究はストリートミュージアムの適用範囲拡大に向け「歴史的な建造物の消失に加え歴史の記憶も失われた空間」における、絵画資料を用いた拡張現実感の有効性を評価することを目的とした。対象とする空間には浅草 6 丁目の猿若町を取り上げた。江戸時代には歌舞伎小屋や芝居茶屋が軒を連ねる芝居町として非常に賑わった猿若町だが、芝居小屋の移転や街の開発に伴い現在にその面影はなく、当時の文化や賑わいを偲ぶことは難しい。そして比較評価の対象として、「歴史的建造物も記憶も残されている空間」であり今も昔も多くの参拝客や観光客で賑わう浅草寺を取り上げた。猿若町では歌舞伎や芝居茶屋に関する絵画資料を、浅草寺では江戸っ子達の粋な姿や、大道芸や見世物小屋で賑わった奥山の様子を描いた絵画資料を重ね合わせるコンテンツを制作し比較評価実験を行った。

実験の結果、猿若町の評価はすべての設問において浅草寺と比べてほぼ同等、あるいは同等以上の評価を示した。このことから絵画資料を用いた拡張現実感は、「歴史的な建造物の消失に加え歴史の記憶も失われた空間」の鑑賞支援にも有効だということが示唆された。さらに、意外性や現在とのギャップにより、「当時の賑わいを感じる」「当時の景色を見て驚いた」という項目においてはむしろ高評価となることが示唆された。

研究指導教員：西岡 貞一

副研究指導教員：森田 ひろみ